# 今日の僕はこの本を選んだ

柳下恭平 —— 株式会社鷗来堂代表／かもめブックス店主

**『夜中に犬に起こった奇妙な事件』　マーク・ハッドン**

「あなたにとって特別な一冊を教えてください」と聞かれたら、今日の僕は『夜中に犬に起こった奇妙な事件』マーク・ハッドン著（早川書房刊）という小さなミステリを、かなり迷った末に選ぶと思う。

この本の主人公は、数学の才能を持つ自閉症の男の子で、タイトルの通り「夜中に犬に起こった奇妙な事件」を解決しようと奔走する。……のだけれど、彼には彼の世界があって、彼を取り巻く外の世界からは少しずつズレている。かわいそうに、彼は世界との摩擦に傷つきながら、それでも自分の正義を信じて前に進んでいく、というお話。読みやすくて、しばらくすると、また読みたくなる魅力のある本だ。

数年前、僕は僕の仕事にとって大きな決断をする必要があって、それが最近実を結んできた。その選択をしたときの孤独な感じと、何かを達成したときの晴れ晴れとした感じが、この本の主人公の気持ちにとても似ている気がする。だから、そこにとても共感して、とても特別だと思うので、今日の僕はこの本を選んだ。

このように「あなたにとって特別な一冊を教えてください」と誰かに聞かれたとき、僕はいつもいつも違う本を選んでいるような気がする。なぜかというと、その質問をされた日、まさにその日に僕が一番知りたいことや、強く考えていることによって、「特別な本」に対してバイアスがかかっていくからだと思う。

それはたとえば「フェミニズムとはなにか？」「才能とはなにか？」「モテるとはなにか？」「勉強（学びとその機会）とはなにか？」「小麦粉の人類史について」「宗教の地政学について」「数理学者の評伝」「モテるとはなにか？」「働くということについて」「『利己的な遺伝子』などの生物学について知りたい」「お金（そして経済）とはなにか？」「なぜ僕はモテないのか？」等々、その時、自分が気になっていることに、僕の知的興奮が引き寄せられるからだ。それらの本は「どれも特別だから」なんて言い訳をするつもりはないけれど、自分がアップデートされていくから、特別な本も変わっていくのだと思う。

案外「特別な本を一冊持つこと」と同じくらい「自分にとって特別な本が変わっていくこと」は大事なんじゃないかなって、僕は思っている。